
不死身刑事 -Voice From The Vault-

39 たらう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死身刑事 - Voice From The Vault -

【Nコード】

N7335N

【作者名】

39たろう

【あらすじ】

台詞を中心とした一話完結の脚本風の番外編です。

あくまで番外編という位置づけですので、本編「不死身刑事 - Young And Useless -」<http://ncode.syosetu.com/n5851n/> をお読みになられていることが、やや前提となっております。

本編「不死身刑事 - Young And Useless -」

<http://ncode.syosetu.com/n585>

1 n / をお読み頂いていない方にも、お楽しみ頂けるように書いてあるつもりではありますが、正直払拭できておりません。

説明不足の感は拭いきれておりませんが、独立した読み物として捉えて頂ければ幸いです。

尚、マニア・ネタが豊富ですので、その辺りはご勘弁ください。

取調室（前書き）

「タイトル」

取調室

「ジャンル」

刑事物

「登場人物 二人（男）」

真壁伸一

警視庁捜査一課刑事

29歳

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

若林延童

日本舞踊若林流第五世家元

57歳

プライドが高い

殺人事件の参考人

「題材」

取調べ

取調室

真壁「御暑い中、お呼び立て致しまして申し訳ございません。私、警視庁捜査一課の真壁伸一と申します。階級は巡査部長であります」

若林「ほう。お若いのに礼儀をわきまえていらっしやる。近頃の若いもんにしちゃ珍しい」

真壁「お褒め頂きありがとうございます。…本日は任意同行に応じ、て下さり感謝申し上げます」

若林「こちらこそ。ウチの弟子がこんなことになってしまっ…」

真壁「お気持ち、お察し致します。何でも随分とお目をかけておられたお弟子さんだったと？ …あ！何か、冷たいものでも…」

若林「いや、いらん！舞踊は身体が資本。健康には人一倍気を使っ…ておる。暑い時に身体の冷えるものを飲むなど、愚の骨頂」

真壁「…では、温かいお茶でも如何でしょう？」

若林「それも結構」

真壁「そ、そうですね。先生のお口に合うお茶など本庁にはありませんから。…では、一応事務手続きに入らせて頂きます」

若林「早急に頼む。何せ、忙しい身ですからな」

真壁「日本舞踊の家元ともなりますと、やはりお忙しいのでしょ…う」

か？」

若林「ああ、弟子なら全国におる。そして、舞台も控えておる」

真壁「それは大変恐縮です。では、手短に…。若林延童。本名、細川善政。若林流第五世家元。昭和27年8月21日生まれ。兵庫県出身。57歳。…間違いございませんでしょうか？」

若林「いや、間違いない。…続けなさい」

真壁「被害者は若林沙穂さん。本名、富田沙穂。昭和60年10月15日生まれ。神奈川県出身。24歳。…昨日8月8日、自宅マンションにて他殺体で発見されました。死因は頸部圧迫による窒息死。死亡推定時刻は、昨夜午前2時から3時と断定」

若林「ほう、最近の死亡推定時刻はそこまで細かく分かるのかね？」

真壁「ええ、科学捜査も日進月歩ですから…」

若林「それで、私が犯人だとも？」

真壁「いえ、それは違います。先生が犯人である訳がありません」

若林「ん！？ それは何を根拠に言っておる？」

真壁「先生は人一倍健康に気を使っておられます。そんな深夜に出歩かれる訳がありません。…それに、富田沙穂さんの死体発見時、室内のテレビとエアコンがつけっぱなしでした。エアコンの設定温度は18度と記載されています。先生は先ほど、身体が冷えることを極端に嫌がっておられる様なことを仰っておられました。…そん

な冷え切った部屋に先生が居る筈もないのです」

若林「それで何故、任意同行を求められたのだね？」

真壁「昨夜3時前、先生によく似た人物を乗せたとのタクシー運転手の供述がありました。…しかし、彼の供述には腑に落ちない点があります」

若林「ふん、それは何だね？」

真壁「降ろした場所です。…先生のご自宅は世田谷区九品仏。なのに、東急池上線御獄山駅で降ろしたと供述しています。タクシー・メーターにもその様な記録が残っておりました。…御獄山から九品仏、…あまりにも離れています。57歳の男性が歩くにしては不自然極まりないです」

若林「真壁くん…とか言ったね？ 君は私の体力を随分甘く見てはいまいか？ 仮にも日本舞踊の家元だ。健康にも人一倍気を使っている。それくらい歩く自信だってある。ウォーキングも毎日欠かさない」

真壁「…ですが、映っていないのです。…防犯カメラに」

若林「……………」

真壁「御獄山から九品仏まで徒歩で行くなら、環八通りを通りますよね？ ……普通。深夜も営業しているコンビニやファストフード店には防犯カメラが設置されているのはご存知でしょうか？ それも店内だけでなく、通りに向かってでも設置されています。その時間営業していた環八通りに面するコンビニやファストフード店の防犯カ

メラを洗いましたが、先生らしき人物は映っておりませんでした」

若林「じゃ、私は無罪放免ということだ…」

真壁「あ、いや。まだ、待ってください。大変申し上げにくいことなのですが、あまりにも時間が短いとロクに聴取していないと叱られてしまいます。…最近は特にうるさいですから…」

若林「では！ 前途洋々な若者の為に、もうしばらくお付き合いするとしますか」

真壁「恐れ入ります。任意同行とは職務質問の一種に過ぎません。往々にして、逮捕状を請求して届くまで待てない場合に使われる手段なんです」

若林「もしや、私に逮捕状請求を？」

真壁「それはご心配に及びません。先生に嫌疑はかかっておりません。…ただ」

若林「ただ？」

真壁「…富田沙穂さんの部屋にあった指紋です。先生の指紋が多数見つかっております」

若林「何、そんなことか。…私には娘がいた。幼い頃に病で亡くしたがね。…あのまま成長してくれたら、ちょうど沙穂と同じくらいになっていた。だから、沙穂を自分の娘の様に思っていたんだよ。…そういえば、日曜大工もやったよ。ガーデニングの棚が欲しいって言うもんだから、慣れない日曜大工までやったものだ。お

陰で、少々怪我をしてしまったがね」

真壁「なるほど！ それで先生の血液反応が出たのですね？ でも何故、室内…絨毯の上に血液反応があったのでしょうか？ 確か広いベランダがあつた筈ですが…」

若林「あ…ああ、それは…棚を設置する時に指を切ってしまったからね」

真壁「そういうことでしたか。いいお父さん代わりだったのですね。…ところで、その首筋の傷は如何されたのですか？」

若林「ん？…これは、引つ掻きでもしたのかな？ 夏場は虫が多くて困る」

真壁「そうですね。都会育ちの自分も苦手です。…あ！ 今、何時でしょう。今日に限って腕時計を忘れてしまいました、携帯が時計代わりなんです」

若林「それはお気の毒に。私も普段は時計も携帯も持ち歩かん。…それにしても、その携帯…変わった携帯だね？」

真壁「あ、これですか？ …恥ずかしながら、これは自分の趣味以外の何物でもありません。…ガンダムって、ご存知でしょうか？」

若林「ああ…ガンダム！ 息子が小さい頃、随分とねだってきたよ。…ガンプラとかいうやつを」

真壁「息子さん…若林隆導さんもガンダム好きなんですか？」

若林「まあ、小さい時分はね。今は舞踊に専念しておる」

真壁「そうなんですか。自分はまだ卒業できていません」

若林「しかし、あのガンダム…ただのロボット・アニメだと思っただら大間違いだね。先日観た話は大人が観てもいい話だったよ。…戦争孤児を守る為に軍を抜け島で暮らす男の話。子供達を守る為に古いロボットで新しいロボットに立ち向かっていく。まるで、今の私の様だよ」

真壁「…第15話『ククルス・ドアン』ですね。あれは、テレビ・シリーズの本筋から離れた個別エピソードなんです。主役のガンダムが殆んど活躍しない特殊なお話です。実際、アメリカで放映された時は1本丸ごとカットされています。それ程、番外度の高いエピソードなんです」

若林「ほう、随分と詳しいねえ。こりゃ、参った!」

真壁「ところで、若林延童さん。いや、細川善政さん…その『ククルス・ドアン』をいつどこでご覧になったのですか?」

若林「…ん? 数日前…自宅のテレビで。再放送だったかな? 夏休みの…」

真壁「細川さん、それはおかしいです。今現在、テレビでは再放送されていません」

若林「あ…あれだ! 衛星放送か何かでやっていたのを観たんだっ
た。…有料のやつ」

真壁「…細川さん、それもおかしいんです」

若林「……………」

真壁「…調べさせて頂きました。確かに細川さんのご自宅は有料の衛星放送に加入されています。しかし、細川さんの契約されているチャンネルではご覧になれないんです」

若林「ど…どういうことかね？」

真壁「8月7日午後6時から、とある有料放送のアニメ専門チャンネルで『夏休み特番・機動戦士ガンダム全話一挙放送』が始まっています。この半年以上、他のアニメ専門チャンネルでも『ククルス・ドアンの島』は放送されていません。因みにご自宅からガンダム関連のDVDは一切発見されませんでした」

若林「な…何が言いたいのだね？ 真壁くん！」

真壁「ところが、富田沙穂さんはそのチャンネルに加入されていた。死体発見時、つけっぱなしだったテレビには『機動戦士ガンダム全話一挙放送』が流れておりました」

若林「私は沙穂の部屋でガンダムを観たと言いたいのかね？ そんな証拠がどこに？」

真壁「富田沙穂さんの死亡推定時刻は昨夜午前2時から3時。…『ククルス・ドアンの島』は第15話ですから放送開始は、昨夜の午前2時から…ということになります」

若林「……………」

真壁「細川さん。あなたは富田沙穂さんの部屋に居なければ、『クルス・ドアン』の島』を観ることは出来なかったんです」

若林「…つまり、私が犯人。私が沙穂を殺したという事かね？」

真壁「そうなりますね。少なからず、犯行時間にあなたは沙穂さんの部屋に居た。逃走するあなたをタクシー運転手が憶えていた。…そして、今現在のこの部屋の設定温度は18度です」

若林「真壁くん、御獄山から九品仏まで私はどうやって帰ったと言っただけだね？」

真壁「…細川さん、あなたはこう仰いました『ウォーキングも毎日欠かさない』と…。普段からウォーキングをなさっているのなら、環八通りなど歩きません。多摩川河川敷というウォーキングに最も適したルートがあるではありませんか？ 毎日歩いていらっしやるならば、夜道でも慣れた道です。目撃されることも、まずありません。仮に目撃されたとしても、夜間にウォーキングをしていると装えば誰からも怪しまれませんし、若林延童だとは誰も分からないでしょう」

若林「…動機。動機は何だね？」

真壁「細川さん。あなたは富田沙穂さんと愛人関係にあった。稽古場では誰しもが知るところでした。しかし、それをマスコミが感づきます。それで若林沙穂さんを破門することにしましたが、当然富田沙穂さんはあなたとの関係を断ち切りたくなかった。…如何ですか？ 若林延童さん。いや、細川善政さん」

若林「…真壁くん。君はいつから、私が犯人だと思っていたのかね？」

真壁「最初からです」

若林「若いのに優秀な刑事さんだ、真壁くんは…。日本舞踊の家元の私の方が踊らされていたと…」

真壁「では、直ちに逮捕状請求し通常逮捕の手続きに移らせていただきます。先ほども申し上げましたが、任意同行は逮捕状を請求して届くまで待てない場合に使われる手段であります。お忙しいところ恐縮ですが、本日はお帰りにはなれません」

若林「…このまま、ここで時間を潰せと言っのかね？」

真壁「細川さん、あなたにはあの夕日の美しさもわからないみたいですね」

若林「夕日？ …ああ、確かに綺麗だ。夕日など久方ぶりに見たよ」

真壁「では、細川さん。失礼致します」

若林「真壁くん！ …君の取調べ、戦いは見事だったよ。舞踊のような美しさすら感じさせた」

真壁「…戦いに美しさなど必要ないよ、気を許せば負けるんだ」

13日の金曜日(前書き)

「タイトル」

13日の金曜日

「ジャンル」

刑事物

「登場人物 三人＋一匹(男一人、女一人、犬一匹)」

馬場正(男)

警視庁捜査一課13係係長

妙典と真壁の直属の上司

刑事らしからぬ温厚な性格

得意技はオヤジ・ギャグ

由香(女)

喫茶「ヴァンデンバーグ」の女性バイト店員

20歳

犬を飼っている

クリステイン

由香の愛犬のブルドッグ犬()

由香はかわいいと思っているが、お世辞にもかわいいとは言えない

獣医(男)

由香の馴染みの獣医さん

「題材」

オヤジ・ギャグ

13日の金曜日

由香「ほんとに、すみません。クリスティーンちゃんが、お世話になって…」

馬場「いえいえ、構いませんよ。ウチの部下がいつもお世話になっていますから…」

由香「妙典さんと真壁さんはもう馴染みの常連さんです。こちらこそお世話になっていきます」

馬場「…そうですね、そんな頻繁にサボっていますか」

由香「サボりだなんて…。いつも楽しくさせて頂いています」

馬場「それにしても、このワンちゃん。どこか具合が悪いのですか？」

由香「ええ。どうも熱っぽくて、風邪かと思うんですけど」

馬場「それにしても立派なワンちゃんだ。かなり重たいですな」

由香「ごめんなさい。ただ通りすがっただけなのに…。馬場さん、お仕事の方は？」

馬場「この近くでちょっと事件がありましたね。今はサボり癖のある優秀な部下二人が駆けけずり回っております。こういう時って、結構暇なんですよ。管理職は…」

由香「そうだったんですか。奇遇ですね。今度、馬場さんもヴァンデンバーグにいらしてください。…最近、全然お見えになっていませんし」

馬場「はは、それも部下二人に任せっぱなしです。でも、今度寄らせてもらいますね。…マスターの入れるコーヒーは格別ですから」

由香「ええ、お待ちしております。…あ、ここです。かかりつけの獣医さん」

馬場「ここですか。…では、参りましょう。ワンちゃんが心配です」

由香「…すいません。先ほど、予約入れさせて頂いた…ええ、クリスティーンです。…え？ 早速、診て頂けるんですか。すいません」

獣医「おお！ クリスティーンちゃん。…今日はどうされました？」

由香「何だか、今朝から熱っぽくて」

獣医「そうですか。では、早速お熱を計りましょう。…クリスティーンちゃん、お耳貸してくれるかな」

クリス「ウゝ！！ ワンワンっ！ …ガブっ！」

獣医「あ痛っ！」

由香「あ！先生！…大丈夫ですかっ！？」

獣医「ええ、大丈夫、大丈夫。これしきの傷、何てことありません」

馬場「…そういえば、今日は不吉な日でしたな。…『獣医さんに血の金曜日』」

由香「……………」

獣医「……………さて、お熱はどつかな？」

東京ビッグサイト（前書き）

「タイトル」

東京ビッグサイト

「ジャンル」

刑事物（？）

「登場人物 三人（男）」

妙典博道

警視庁捜査一課刑事

自身を不死身と信じて疑わぬ男

頭は頭突きの為に存在すると思っっている肉体派

「ヘビーマタルに生き、ヘビーマタルに死ぬ…けど、俺様不死身だから死なねえ」がモットー

真壁伸一

警視庁捜査一課刑事

妙典の部下・後輩

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

ミネバ・ラオ

ガンダム・オタク

真壁の盟友（？）

「題材」

オタク話

東京ビッグサイト

妙典「な…何だあ!？ この人の多さはよおおおおお〜!？」

真壁「…『コミックマーケット78』。別名、夏コミ。…世界最大の同人誌即売会であり、屋内で行われるものとしても世界最大級のイベントです」

妙典「お台場署の応援要請で警備に来たはいいが、エライ所に来ちまったもんだなあ…」

真壁「今日15日は特に大変です。レインボー・ブリッジも封鎖していますし、お台場署は猫の手も借りたい状況に違いありません」

妙典「しかしよお、至る所で目にするオードリー春日とナイツ土屋の漫画…なんなんだ？　ありゃ？」

真壁「おそらく初日で売られていたBL本ですね。今日もどこかで売られているのでしょうか？」

妙典「…BL？　美味しいのか？　それ」

真壁「…ボーイズラブ…男性同士の同性愛をテーマとした一般には女性向けの小説や漫画のことです」

妙典「気色悪いなあ、何だか。しかし…流石は、変態オタク眼鏡小僧。こういう話に関しちゃ頼りになりやがる。…何なら、欲しい本でもありゃ、買って来いや。ここは俺様が引き受けた!…つーか、これ以上一步も進みたくねえ…」

真壁「妙典さん、誤解しないで下さい。確かに自分はガンダムに関しては、オタクの領域に足を踏み入れています。…ですが、同人など自分の趣味の範疇でないことだけは、はっきりと申し上げておきます！」

妙典「…ホントかあ？ ガンダム関連のがあったら…どうする？」

真壁「ガンダム関連で自分を納得させる同人誌など、この世に存在しません。…それに初日の13日と昨日の14日がアニメやゲーム映画、音楽、芸能のサークルが参加する日で、最終日の3日目は創作系やR18ゲームが多く集う日なのです。…ご心配には及びません」

妙典「でもさつきから、何か様子がおかしいんだよなあ。…てめえ、無理しなくていいんだぞお」

真壁「妙典さん、寧ろ自分は東京ドームシティで開催されている『ガンダム SUPER EXPO 東京2010』の方に興味があるだけです」

妙典「ほお…、そんなのもあるんだあ。いいのか？ …そっちに行かなくて？」

真壁「10日からの開催でして、実はもう…既に足を運んでいます」

妙典「それは、それは。ガンダムの事に関しちゃ…流石としか言えねえなあ…」

ミネバ「…フォーラ！ フォーラ！！」

真壁「……………」

妙典「ん！？ 何か、呼んでるみてえだぞ」

真壁「……………」

ミネバ「…あ！ やっぱ、フォーラじゃん！？ どうしたの？ 仕事って聞いてたけど…」

真壁「…い…今が…仕事だ。…ミネバ・ラオ」

妙典「何だあ？ 知り合いかあ？」

ミネバ「ああ…そうだけど、何か？ それより、あんたこそ何さ？ ……バイ…フォーラの盟友、ミネバ・ラオ！」

真壁「く…口を慎め！ ミネバ・ラオ！ 自分の上司だ！」

ミネバ「何、そういうこと…。警備、ご苦労さまでス！」

妙典「ところで、そのフォーラって呼び名だが…？」

真壁「…ハンドル名といいますか…通り名です」

ミネバ「ええ〜！？ そんなことも知らないのおおおお〜？ エウーゴ創始者のブレックス・フォーラだよ。…で、自分のミネバ・ラオってのは…」

真壁「口を慎めと言っとなるだろおおおおおおおー！！ ミネ

バ・ラオ・ザビイイイイ！」

ミネバ「何、怒鳴ってんだよ。警備で来たんだろ。…それよりも、フォーラの分析本…タイトルも内容も濃すぎて全く売れてないんだああああー」

妙典「ははあ〜ん。何となく読めてきたぜ。…真壁え、てめえ…本気でオタクだったなあ。それも、同人誌まで発行するほどのなあ…」

真壁「…妙典さん、別に隠すつもりはなかったんです。…ただ、一応公務員ですから、この様な活動は相応しくないかと思ひまして…」

妙典「…で、コレか？ てめえが書いた分析本てえーのは…。は〜ん？ 『リメンバー・ラプラス』アナハイム・エレクトロニクス社とビスト財団の持つ箱』…フォーラ著。どこにも『ガンダム』って入ってねえーが、関係あんのかあ？ …ガンダムと」

真壁「はい、思いつきり。…何故、人類は地球を捨て宇宙にいったのか？ 何故、西暦から宇宙世紀に変わったのか？ ガンダムという物語を語る上では欠かすことの出来ないラプラス事件の陰謀を暴く真壁伸一改心の意欲作です」

妙典「スマン！ 何言ってるか、さっぱり分からねえ…」

真壁「そ…それはですね…」

妙典「…で、いくらだ？ この本」

ミネバ「…500円だけど…」

真壁「みよ…妙典さん!？」

妙典「あ?…ああ、変態オタク眼鏡小僧の動かぬ証拠品として、なけなしの500円払ってやる」

真壁「みよ…妙典さん、こんなに嬉しいことはない。…お買い上げ頂き、まことにありがとうございます!」

妙典「…そのかわり、明日には鑑識に回ってるかもなあ…」

画廊茶館（前書き）

「タイトル」

画廊茶館

「ジャンル」

刑事&恋愛物

「登場人物 四人（男三人、女一人）」

妙典博道（男）

警視庁捜査一課刑事

自身を不死身と信じて疑わぬ男

頭は頭突きの為に存在すると思っっている肉体派

「ヘビーメタルに生き、ヘビーメタルに死ぬ…けど、俺様不死身だから死なねえ」がモットー

真壁伸一（男）

警視庁捜査一課刑事

妙典の部下・後輩

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

水無月瞳子（女）

商店街の片隅に建っている、緑色の屋根をした小さな茶館

「画廊茶館」の古い木製の扉を開けると・・・

「いらっしやいませ！」

ドアベルの音と共に、瞳子さんの涼やかな声が響きます

佐竹良一（男）

指名手配犯

「題材」

コラボ

「コラボ作品」

The Story of Art gallery Coff
eeshop 「メモリーズ」

<http://ncode.syosetu.com/n87341/>

「監修」

沢渡優希さん (ID:17889)

画廊茶館

妙典「ひいえええええー！ 参ったなあ！…ずぶ濡れだぜ！」

真壁「流石にこの夕立までは予測できませんでした。しかし妙典さん、いい所に喫茶店があつて助かりましたね」

瞳子「……………いらっしやいませ。画廊茶館へようこそ！」

妙典「おう！べっぴんさん、ちょっと邪魔するぜ！」

瞳子「あらあら、たいへん！ タオル、持ってきますわ」

真壁「でも妙典さん、張り込みの途中です。いいんですか？ 喫茶店なんかに逃げ込んで…」

妙典「気にすんな！ きつとホシもどこかで雨宿りしてやがる」

瞳子「お…お待たせしました。少し厚手ですけど、体の冷えは凌げますわ」

妙典「すまねえな！ 黒髪のべっぴんさんよお！」

真壁「ほんと助かりました。ありがとうございます」

瞳子「（何なのでしょう？ この人たち。都会のにおいがぶんぶんとします）…体をお拭きになられたら、カウンター席へどうぞ！」

妙典「いや、そっちのテーブル席にしてくれや。あの、真ん中のよ

お
」

瞳子「（男性でいらっしやるのにテーブル席をご希望なんて、珍しいこともあるものです）…え…ええ、どうぞ。」ゆっくり

真壁「…で、いいんですか？ 張り込み中なんですよ。ここは、やや死角が多いかと思えます」

妙典「俺様は窓際。変態オタク眼鏡小僧は窓から外を見張ってるや」

真壁「…そういつことですか」

瞳子「…ご注文は？」

妙典「コーヒーくれや。ブラックでな。…それと腹減ったから何か美味いもんでも食わせてくれや、べっぴんさん」

瞳子「はい。…（それにしても、こちらの黒Tシャツの方…ガサツで強引で、私好きにはなれません！）」

真壁「じゃあ、自分はカフェラテを下さい」

妙典「おい、珍しいなあ。てめえがコーヒー頼むなんて、いつもアイステイーなのによお…」

真壁「妙典さん、お店に入った時にエスプレッソのいい香りがしたんです。それで…」

瞳子「カフェラテですね。…（こちらのぴしとつしたスーツに眼鏡の男性、同じ都会のにおいなのに雰囲気違います）」

真壁「…ちなみにラテアートできます?」

瞳子「こんな事を言っではお客様に失礼なのですが、私などまだまだですわ」

真壁「できる…と、いうことですね? じゃ、お願いします」

瞳子「お時間はよろしいのですか? お急ぎのようですから」

真壁「妙典さん、どうなんです?」

妙典「…この夕立、暫らく止みそうもねえからなあ。…で、その『ラテアート』って曲、かっこいいのか?」

真壁「妙典さん。曲ではありません。…バリスタがエスプレッソの上で作るデザインのことです」

妙典「バリスタ…めっちゃかっこいい響きのバンド名だなあ。それ、どこのどいつだ?」

真壁「…こちらのお嬢さんです」

妙典「えええー!? このべっぴんさん、バンドやってんのかあ?」

瞳子「ふふ…、バリスタとは、カウンターに立ってお客様からのご注文を受けてエスプレッソなどのコーヒーを淹れる職業のことです。…でも、私などまだまだですわ」

妙典「へえー、かっけー名前だと思ったのによお。…で、べっぴん

さん！ あんた、何て名だあ？」

瞳子「（え？ これって、ナンパというものなのでしょうか？）…
私は…私は瞳子です、水無月瞳子といます」

妙典「水無月い！？ 随分、変った名前だな。ま、俺様も他人のこと
と言えんがな。…妙典だ。不死身の妙典と呼んでくれ」

真壁「自分は真壁といます。』とっこ』さんと仰いましたね？
どの様な字を書かれるのでしょうか？」

瞳子「…目の『瞳』に子供の『子』です」

真壁「お美しいお名前なんですね。…あ！ ポットのお湯が！？」

瞳子「あらあら、たいへん！」

妙典「…しかし、えれえ、べっぴんさんだなあ。こんな寂れた商店
街に居て良かったぜ。東京に居りゃ、間違いなく狙われるわな」

真壁「そういう妙典さんこそ、既に狙っていたりしませんか？」

妙典「変態オタク眼鏡小僧お！ てめえ、……………ん？」

真壁「どうかしました？ 妙典さん」

瞳子「いらっしやいませ。画廊茶館へようこそ！」

佐竹「……………」

瞳子「カウンターの席へどうぞ！ お客様もずぶ濡れですね。タオル、お持ちしましょうか？」

佐竹「…いや、いらん」

妙典「現れやがったなあ、佐竹の野郎。同じく雨宿りかあ？」

真壁「どうします？ カウンターには瞳子さんがいます。店を出るまで待ちますか？」

妙典「…そうだな、それが一番安全そうだな」

瞳子「ご注文は？ …きゃっ！！」

妙典「！！！」

真壁「！！！」

佐竹「おい！そのデカ！…居るのは分かってるぜえ。一歩でも動いてみる。この女の首、切り落としちまうぜ！」

瞳子「あ……………」

真壁「危険な状況です」

妙典「おい！佐竹！！…てめえもこの店の常連かあ？」

佐竹「近づくなと言ってるだろお！」

妙典「なんだ、同じ常連さん同士親睦でも深めようかなあ…と思う」

ただけだつちゆうのに…」

佐竹「それ以上近付くんじゃねえ！ 今すぐ車を手配しろ！ …何
タオルなんかで汗、拭ってやがる！」

妙典「こつ蒸し暑くちや堪らんわな…」

パシッ！（湿ったタオルの先が佐竹の右手を弾く音）

佐竹「あうあっ！」

妙典「今だ！真壁！」

真壁「はいっ！」

佐竹「あ痛てててて！」

妙典「… 8月18日16時18分、佐竹良一逮捕」

カチャ！（手錠の締まる音）

真壁「瞳子さん、大丈夫ですか？」

瞳子「はあ…」

真壁「ご安心ください。我々、警視庁捜査一課の者です。指名手配
犯の潜伏先情報がありまして、ここまで追って来ました。驚かせて
すいません」

妙典「ああ…腹減ったなあ。…べっぴんさん、早く注文持ってきて

くれや」

瞳子「あ、はい！た…ただいま！」

妙典「ああ！あと…佐竹とは勘定、別にしといてくれよな！…ほら、佐竹！てめえもこっち来いや。俺様は腹が減ってんだ。暫らく付き合えや！」

佐竹「……………」

真壁「ワッパしてると食べにくそうですね」

妙典「いい迷惑よ」

瞳子「ご注文、お待たせしました！ ブラック・コーヒーとカフェラテですね」

真壁「ん？ このラテアートは？」

瞳子「真壁さんの眼鏡ですわ！」

真壁「…そりゃ、どうも」

瞳子「そして、こちらが本日の特製メニュー『カレイのソテー・バターソース』ですわ。…たくさん食べて下さる男性って、魅力的ですよね」

妙典「…今度は『カレイ』かよ…。べっぴんさん！ いや、水無月瞳子さん、あんたやるなあ！」

瞳子「これからもよろしくお願いします。私の事は姓ではなく、瞳子と名前で呼んで下さい！」

スキッド・ロウ（前書き）

「タイトル」

スキッド・ロウ

「ジャンル」

刑事物（？）

「登場人物 三人（男）」

妙典博道

警視庁捜査一課刑事

自身を不死身と信じて疑わぬ男

頭は頭突きの為に存在すると思っっている肉体派

「ヘビーマタルに生き、ヘビーマタルに死ぬ…けど、俺様不死身だから死なねえ」がモットー

雷門史彦

警視庁捜査一課管理官・警視

頭脳明晰

冷静沈着

ブリティッシュ・ハードロックを語り始めたら地球温暖化に影響を及ぼすぐらい熱い男

事務吏員（総務部）

事務職採用の職員

警察官ではない為、警察官の制服の支給はされない

この為、私服勤務者が多い

「題材」

スキッド・ロウ

事務「雷門史彦警視、お荷物が届いております」

雷門「おお、これはすまない。…受領印はここでもいいのですか？」

事務「ええ、そこで結構です。…では、確かに」

雷門「この包みの大きさ。…そして薄さ…間違いなくアレに違いな
いようですね。…この目を、どんなに待ちわびたことか」

妙典「雷門さん！ どうしたんスかあ？ 妙に、ニヤついて…」

雷門「おお、妙典か。…遂に最重要物件を手に入れましたよ」

妙典「ほお…。何かアナログ・レコードみてえですが、証拠品なら
鑑識に早く回した方がいいんじゃないス？ …いつも雷門さんに怒
られてますからね。…俺様」

雷門「妙典！…これは鑑識には回しません。私的重要物件ですから
…」

妙典「困りますなあ…。公私混同されちゃ…と、いつも俺様に言っ
てましたよねえ」

雷門「妙典、…君も世帯を持てば分かります。こんな物に何万もか
けたと家内に知れたら、それこそ大事件に発展します」

妙典「へえ！そんなにレアなレコードなんスかあ！？」

雷門「…スキッド・ロウの『New Places, Old Places / Misdeemeanor Dream Felicity』。1969年の発売です。…フィル・リノットが在籍した唯一のシングル盤です」

妙典「雷門さん！ スキッド・ロウつつたら、やつぱ『Slave To The Grind』でしょ？ …セバスチャン・バツクのいた」

雷門「妙典っ！！ 君の言っているスキッド・ロウと自分の言っているスキッド・ロウは全くの別物です！ ゲイリー・ムーアがアイランドで結成したトリオ・バンド。…フィル・リノットがいて、ブラッシュ・シールズがいて、ノエル・ブリッジマンがいたバンドこそ、スキッド・ロウの名に相應しいのです！」

妙典「はあ？ 俺様のスキッド・ロウは1986年にニュージャーシーで結成されたメタル・バンド！ セバスチャン・バツクにデイヴ・スネイク・セイボ、レイチエル・ボラン、スコッティ・ヒル、ロブ・アプューソがいたバンドこそがスキッド・ロウなんですけどねっ！！！」

雷門「妙典、君のロックはまだまだ甘いです！ ゲイリー・ムーアのスキッド・ロウを知らずしてロックを語るのはいささか早計かと思えます！」

妙典「は？ 雷門さんこそ！ 『モンキー・ビジネス』から『スレイヴ・トゥ・ザ・グランド』にたたみかける、あの一瞬を聴かずにスキッド・ロウを語るにゃ、100万年早ええええですぜっ！！ 超名曲『クイックサンド・ジーザス』から『サイコ・ラヴ』の

流れも最高だ！ ガンガンですぜっ！！」

雷門「な、何を言っているのですか！？ サイケ、ジャズ、ハード
ロック、プログレッシブ、ブルースが入り乱れた強力なバンドこそ
が、スキッド・ロウなんです！ 『UNCO・UP・ショウバンド・
ブルース』を聴いていない妙典！…君に何が分かると言うのです！
そもそもスキッド・ロウというバンドが2つ存在することが、お
かしい。だいたいゲイリー・ムーアがいてこそ……………」

妙典「…ち！ 始まつちまつたか。地球温暖化に貢献する前に対処
せにやエライことになる。…おい！ 冷房の温度下げてください！
…できるなら、思いつきマイナスまで下げてください！ …でなき
や、今すぐ地球が壊滅しちまつっ！」

祝一周年（前書き）

「タイトル」

祝一周年

「ジャンル」

刑事物（？）

「登場人物 三人（男）」

妙典博道

警視庁捜査一課刑事

自身を不死身と信じて疑わぬ男

頭は頭突きの為に存在すると思っっている肉体派

「ヘビーマタルに生き、ヘビーマタルに死ぬ…けど、俺様不死身だから死なねえ」がモットー

真壁伸一

警視庁捜査一課刑事

妙典の部下・後輩

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

39たろう

正体不明の超弩級ド素人モノ書き

「題材」

感謝 祝一周年

祝一周年

真壁「不審者の通報があつて来てみたはいいですが、人が多過ぎて…どこにいるのか分かりませんか？」

妙典「うーん、ここまでゲソが集まると、分かんねえーぞ。…身体的特徴、何か聞いてねえーか？」

真壁「…いえ、ただ不審な人物がいる…とだけです」

妙典「ん！？ ひよつとして、あいつじゃねえーかあ？ あの長机に座つてやがる野郎…」

真壁「え！…彼ですか？ 不審と言えは不審ですが、大人しく座っているだけに見えます」

妙典「妙な貼り紙や冊子もあることだし、どっかの政治団体の奴だぜ！…きつと」

真壁「でも、その割には黙つて座っているだけです。ちよつと違つんじゃないでしょうか？」

妙典「黒Tシャツにジーンズか…。何か、俺様と同じ様な風体だなあ、あの野郎」

真壁「確かに妙典さんと似たような格好ですね。…ということは、妙典さんも十分不審人物ということになります」

妙典「うるせえ！！ 俺様はポリシー持って、この格好してんだよ。

アイジンテテー…とかいうやつだ！」

真壁「…妙典さん、それを言うなら『アイデンティティー』です。しかし妙典さんとは違って随分とスリムと言いますか、華奢な人物ですね。目つきは鋭いですが、頬も扱っていますし、目の隈がひ弱さと怪しさを醸し出しています」

妙典「真壁え！あの野郎、氣いつけるお！ 着ているＴシャツ…アーク・エネミーだ。それもキャシードラルの前座として初来日で来た時のＴシャツだぜ。…あの頃に既にアーク・エネミーに目をつけていやがった。それも会場にも足を運んでやがる。…ただ者じゃねえ、舐めてかかんじゃねえぞ！」

真壁「とりあえず、職質…掛けてみますか」

妙典「兄ちゃん、ちょっとすまねえが…こういうもんだ。話聞かせてくれや」

39「け…警察！？ な…何もしてませんよお！ …そりゃ、10代の時はいろいろ警察にご厄介になったことはあります…けど、成人を迎えてからはスピード違反と駐車禁止と違法改造ぐらいしかないっすよ…！」

妙典「不審人物の通報があつて、ちょっと調べてんだ」

39「まあ、確かに自分は目つき悪いっす。黙つてると怖いつてよく言われます。…けど、刑事さんのそのＴシャツ…チルドレン・オブ・ボドムのやつっすよね。確かクラブチッタで人が入りきらなかった伝説のライブの…！」

妙典「ええっ!? ひよつとして、そんな時お前もいた?」

39「ええ、ボトル・ワイン無断で持ち込んで大騒ぎしてましたよ」

妙典「真壁え、こいつあ不審者じゃねえ。俺様と同じ熱いメタル魂を持つ模範的市民だ!」

真壁「みよ…妙典さん! それじゃ全く、職質になっていません! …で、あなたは今ここでいったい何をなさっているのでしょうか?」

39「え? 今っすか? …自分、こつ見えてもド素人の物書きなんすよ。それも、超弩級の…。苦手科目は国語というハンデを乗り越えて小説書いてみたんです。…刑事物ですけど」

真壁「これが、それですか。…『無敵刑事 - Delight And Angers -』。これを『自身で?』」

39「ええ、こつ見えても警察やミリタリー関係にも詳しくて、…何かこつ魔が差したというか、勢いで書いてしまいました」

真壁「…『自身を無敵と信じて疑わないヘヴィメタルを愛するポンコツ刑事と若くして出世街道に乗ったエヴァンゲリオン・オタクの刑事が新設された警視庁捜査一課0係で織り成す刑事物語』…。うむ、何か設定が微妙にリアルですね…」

妙典「何か、他人の気がしねえのは気のせいかなぁ?」

真壁「アマチュアの物書きさんであることは理解しました。…しかし、ここで何をなさっているのでしょうか?」

39「ちょうど今日で連載一周年を迎えるんす。先日、無事完結もしましたし、『祝一周年』ということで感謝の気持ちを込めて、ここで冊子を無料で配布してるんすが…誰も手にしてくれないっす。自分の書いたものは、そんなにつまらないものっすか？ 刑事さん!？」

妙典「…兄ちゃん、それはちょっと違うと思うぞお…」

39「え!？」

真壁「…おそらく、長机に貼ってある…その貼り紙に大きな問題があるかと自分は思います」

39「へ!？ この『祝一周年』の貼り紙がですかあ!？」

妙典「よく見てみるや！ このド素人が!」

39「…ん!？ 『祝一周年』？ ああっ!？ しまった！ 『祝』が『呪』になってるじゃないすか!？」

真壁「誤植…ですね」

妙典「そりゃ、誰も怖がって近づかねえわな…」

39「あ…ありがとうございます！ 一層精進して立派な物書きになりたいと思います。これからも、よろしくお願い致します!」

妙典「…で、この『無敵刑事 - Delight And Angers -』…続編はあんのか?」

39 「刑事さん…それについては黙秘します」

取調室2（前書き）

「タイトル」

取調室2

「ジャンル」

刑事物

「登場人物 三人（男）」

真壁伸一

警視庁捜査一課刑事・巡査部長

妙典の部下・後輩

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

小川健太

警視庁阿佐ヶ谷署生活安全課・巡査

刑事になることを目標に日夜努力を惜しまない

凄く真面目で、実は妙典さん並に強いらしい

でもどこかの何かがズれており空回りしている感は否めない

藤波

警視庁阿佐ヶ谷署刑事・警部

真壁の前上司

叩き上げで人望もある

「題材」

変わるうとする努力と実績

取調室 2

小川「よ、よいですありますか！ もう証拠は十分に拵がっているんです！」

小川「そうやって、いつまでもシラを切っていると裁判になった際、悪影響を及ぼすだけなんですよ！」

小川「…どうですか？ 煙草でも一本…。気分が変わるかもしれませんが…」

小川「心変わりはしましたか？ ゲロするなら今のうちです。…本官の我慢も限界に近いですから…」

小川「な…何ですとっ！？ まだシラを切るおつもりですか!?!？」

小川「ご覧なさい。ここにある証拠の数々は全てあなたを指し示しているんです！」

小川「…因みに本官、こう見えても柔道も剣道も有段者であります。必殺技は柔道フックです。…そんな本官を怒らせるとどうなるか？ 当然、予想されての発言でありますよね？」

小川「あまり、こういうことは好ましくないので…仕方ありません」

小川「鉄拳制裁でありますっ!?!？」

小川「…はあはあ、この痛み…被害者の痛みとご理解ください」

小川「では、こうしましょう。あなたがご存知の事を僅かでも話して下されば情状酌量とみなされて、罪状は軽くなることでしょう」

小川「…で、カツ丼、食べますか？ 本官がおごるでありますよ。まあ…食べながら、よく考えてみて下さい。あなたにもご家族がいらっしゃる。最良の行動は何なのか？ よく、お考えになってください。何でしたら、今ご家族と電話で話でもされます？ …本官はそれまでお待ち致します」

サッ！（マジックミラーのカーテンが閉まる音）

藤波「…このところ、いつもああなんだ。どうも事情聴取のシミユレーションをやっているみたいなんだが…」

真壁「藤波さん、はっきり申し上げます。…事情聴取としては0点です」

藤波「やっぱり、そう思うか。…真壁も」

真壁「まず、…取調室は禁煙です。容疑者への身体への接触も禁じられています。…そして、容疑者に不安を与えたり、困惑させたりする言動と便宜供与は固く禁じられています。それと、取調官が自らの金銭で購入した飲料や食物を与えることもいけません。…あと、携帯電話等での通話やメール送信の強要も許されない行為に該当します」

藤波「刑事になるうとする努力と熱意は認めるが、…どうも空回りしていると思えん」

真壁「小川巡査の刑事に対する熱意には並々ならぬものがありますからね。…そこ…だけは、評価してもよいかと思います」

藤波「…しかし、あの格好…Tシャツにジーンズ…どうにかならんもんかねえ？ …あれじゃ、まるで妙典さんだ」

真壁「藤波さん、率直に申し上げて…目標とする先輩刑事に大きな目測の誤りが見られます」

藤波「そう思うだろ？ 真壁、頼みがある。お前から小川に、そう言っただけで済んでくれんか？」

真壁「ふ…藤波さん！ 自分が…ですか？ …申し訳ありませんが、それはお断りさせていただきます。…何せ上司批判ともなりますと…軍法会議での厳罰は免れんな」

藤波「ぐ…軍法会議イ？ 何言っただ、真壁！」

真壁「あ！ いやいや、藤波さん。ジョークです。ジョーク。…と
いうか、ここ最近の自分の癖でもありませんか？」

藤波「…真壁。…お前、本庁に行って、何か変わったなあ…」

真壁「…ふ、藤波さんにそういう言われ方をされるのは心外だ」

鑑識（前書き）

「タイトル」

鑑識

「ジャンル」

刑事物

「登場人物 三人（男）」

妙典博道

警視庁捜査一課刑事

自身を不死身と信じて疑わぬ男

頭は頭突きの為に存在すると思っっている肉体派

「ヘビーマタルに生き、ヘビーマタルに死ぬ…けど、俺様不死身だから死なねえ」がモットー

真壁伸一

警視庁捜査一課刑事・巡査部長

妙典の部下・後輩

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

倉田勝則

警視庁刑事部鑑識課・巡査長

オタク想像図と一筆たりとも違わぬ見事なまでのオタクで且つオカマというツワモノ

鑑識官としては、かなりの凄腕

素っ気無い妙典に恋焦がれている

「題材」
おたく鑑識

真壁「く、倉田さん！ 例のお探しのブツ！…持って参りましたっ
！」

倉田「はあ〜い 待ってたわよ、そのブツ。…早速、貸してみ
て かなりの重要物件よね …コレ」

真壁「は…はい。そうですね。…こちらになります」

倉田「まずは、外箱から…」

真壁「最終話のコロニーレーザー内部での様子と思われませ
す」

倉田「それに、見て！…これ。背景に百式とキュベレイが
いるわ」

真壁「箱絵からして、制作側の熱い意志が伺えますね」

倉田「そして、この重量。…これは今までにないMG
よね」

真壁「はい。おっしゃる通りです。MG誕生15周年。ファン
の熱い支持に満を持しての600gです」

倉田「…じゃ、開けてみるわ」

真壁「…こいつ…何だ!？」

倉田「か…完全にやられたわ。流石はVer・Ka」

真壁「倉田さん、それは…『私の知らない武器が内造されているか?』…ということなのでしょうか?」

倉田「そ…そうね。それにしても、この大型キット…見事としか言いようがないわ」

真壁「全高約248mm。本体重量を支える関節の構造! …ディテール再現を兼ねたインナーフレームによるウェイト配分で自立性能を確保しています」

倉田「それだけじゃ、ないわ。…隠し腕のギミックも完全に再現されてる」

真壁「指先の稼動はもちろんの事。エプロン基部を含め広い可動範囲を確保しております」

倉田「それでいて、この重量感…堪らないわ」

真壁「…まさに…『落ちろ、蚊トンボ』ですね。倉田さん」

倉田「ええ、そうね。装甲の二重化、骨太感溢れる脚部…」

真壁「倉田さん、もうひとつ重要な事実があります」

倉田「え?…何?…それは?」

真壁「元来不要だと言われ続けてきたモノアイのマーキングシール、…今回は敢えて付属されておりません」

倉田「ほ…本当だね。…そして部品数も必要最小限に抑えられてい

る」

真壁「更にフレーム装甲等全体のディテールアップはもちろん、装甲裏面の細部表現…芸が細かすぎます」

倉田「ま…真壁くん！ く、首の座面までも…。これは、タダの『重MS』じゃないわ」

真壁「ただ…良い事ばかりじゃ、ありません。握り手が4つに対して、ビームサーベルは2本しかありません。あと、スラスターの色塗りが少々面倒かと思われます」

倉田「ま、仕方ないわね。真壁くん…」

バンっ！（荒々しげに扉が開く音）

妙典「変態オタク眼鏡小僧！ こんなトコで油売ってやがったか！
？ …ヤマだ！ 事件だ！ 行くぞっ！」

真壁「…ほう、事件ねえ」

妙典「はあ？ 舐めてんのか？…てめえ」

真壁「…不愉快だな、この感覚は。生の感情を丸出しで戦うなど、これでは人に品性を求めるなど絶望的だ」

妙典「真壁え、本気で喧嘩売ってんのか？ いいから来やがれ！ この野郎！」

妙典、真壁を羽交い絞めにして連れ出そうとする。

真壁「うぐ！うつお、おああああ！！…ジ・〇、動け！ジ・〇！
なぜ動かん！？」

倉田「後は任せてちょうだい、真壁くん…」

真壁「…私だけが…死ぬわけがない…貴様の心も一緒に連れていく
…く、倉田さん…」

倉田「真壁くん！ あたしからも言っておくわ。…ちっばけな感傷
は世界を破滅に導くだけだ、少年！！」

妙典「なあ？ さつきから…てめえら何言ってるか、さっぱり分か
らねえんだが…」

倉田「妙典さん 天才の足を引つ張ることしかできなかった俗人
共に何ができた！！…」

真壁「…常に世の中を動かしてきたのは一握りの天才だ！！」

妙典「なあ？…ガンブラひとつでそこまで言えるお前らって、…ア
ホだろ？」

ワクチン接種（前書き）

「タイトル」

ワクチン接種

「ジャンル」

刑事物（？）

「登場人物 二人（男）」

妙典博道

警視庁捜査一課刑事

自身を不死身と信じて疑わぬ男

頭は頭突きの為に存在すると思っっている肉体派

「ヘビーマタルに生き、ヘビーマタルに死ぬ…けど、俺様不死身だから死なねえ」がモットー

真壁伸一

警視庁捜査一課刑事・巡査部長

妙典の部下・後輩

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

「題材」

注射あるある

ワクチン接種

真壁「ああ…随分と並んでいますねえ。…ワクチン注射の列」

妙典「…ああ！…そうだな」

真壁「ま…最近、色んなウイルス性の病原菌による病が流行ってますから、仕方ないですね」

妙典「…ああ！…そうだな」

真壁「ウイルスに感染しやすい医療従事者だけでなく、不特定多数の市民と接しなければいけない我々警察官も感染拡大防止の為に厚生労働省から支給されるワクチン接種の優先順位は高いですからねえ」

妙典「…ああ！…そうだな」

真壁「ところで、妙典さん。何か、今日様子おかしいですよ」

妙典「…ああ！…そうだな。…って！何もおかしくねえだろうーがあ！…ほれ、いつも通り…」

真壁「妙典さん。自分も刑事です。不審な挙動だと思えます」

妙典「そ…そんなこと、ねえって！まだまだ、あめえゝなあ…。真壁」

真壁「いえ、そんな事はありません。その証拠に今日一度も自分の

事を『変態オタク眼鏡小僧』と呼んでいません」

妙典「え？…そうだっけ？ 真壁え。お前何気に、そのフレーズ気に入ってんな？」

真壁「気に入っている訳ではありません。ただ日常として、既に受け入れていきます。…あ！ どちらへ？」

妙典「ちょ…ちょっと駆け込み寺へ…」

真壁「先程から何度も行つてらっしゃるじゃありませんか。…やはり様子、…変ですよ」

妙典「てめえの刑事眼はその程度か？ ほれ！…シュツ！シュツ！」

真壁「妙典さん！ シャドーボクシングなんてしないで下さい。不衛生です！」

妙典「逐一うるせえーなあ、真壁。じゃ、フツ！フツ！フツ！」

真壁「妙典さん！ じつとしてください！！ スクワットなんて今する必要ありません！」

妙典「…なあ…真壁え、…ちょっと頼みがあるんだが…」

真壁「はい。何でしょう？」

妙典「…ちよつと、…順番変つてくんねえか？」

真壁「え？ 順番で。ワクチン接種の順番ですか？ …自分が先でよろしいのですか？」

妙典「ああ、全然構わねえ…」

真壁「妙典さん？ ひとつお伺いしますが、…ひよつとして注射…
苦手なんじゃありませんか？」

妙典「ば…馬鹿野郎っ！！ この不死身の妙典に怖いもんなんてある訳ねえだろお！…たかが注射ごときで、この俺様が死ぬわけねえっ！」

真壁「妙典さん。尋常じゃない汗のかき方なのですが…」

妙典「い…今は何も喋りたくねえ。…ノーコメントだ」

真壁「はは〜ん。不死身の妙典さんにも、死ぬほど怖いものがありましたか…。まあ、人間ですから…怖いものひとつやふたつあっても、何ら不思議ではありません」

妙典「お…俺様に怖いもんなんか、ある訳ねえっ！…注射なんて全然、怖くねえぞおおおおー！」

真壁「…凶星のようですね。じゃ、妙典さん…お先に失礼します」

妙典「……………」

真壁「…はい。すんなり終わりました。しばらく熱っぽくなることもあるかもしれませんが、それはワクチン接種によるもので風邪等の症状ではありません」

妙典「…なあ、真壁え。ひとつ聞かせてくれや」

真壁「はい？ 何でしょう」

妙典「い…痛かったか？ 注射、…痛かったかあっ!？」

真壁「妙典さん、ズバリお答えしましょう」

妙典「……………」

真壁「…一つ忠告しておく…死ぬほど痛いぞ!」

取調室3 (前書き)

「タイトル」

取調室3

「ジャンル」

刑事物

「登場人物 二人」

真壁伸一 (男)

警視庁捜査一課刑事

29歳

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

横川貴子 (女)

殺人被害者・横川重雄の妻

48歳

ブティック店経営

殺人事件の参考人

「題材」

取調べ

取調室3

真壁「大変お忙しい中、お呼び立て致しまして申し訳ございません。私、警視庁捜査一課の真壁伸一と申します。階級は巡査部長であります」

横川「あら？ お若いのね。…私に若い子を宛がうつもりなのかもしれないけど、興味ないの。…若い子には」

真壁「そ、そうですか。自分ではお相手になりませんか。…しかし、本日は任意同行に応じて下さり感謝申し上げます」

横川「礼儀だけは一人前ね。若い子にしては珍しいわ」

真壁「ありがとうございます。…では、早速本題に入らせて頂きます」

横川「どうぞ」

真壁「被害者は横川重雄さん。56歳。…昨日9月18日、自宅マンションにて絞殺体で発見されました。死亡推定時刻は、昨夜午後6時から10時ごろと推定」

横川「あら？ 随分と時間が曖昧なのね？」

真壁「ええ、即死となれば死体の硬直状態で死亡推定時刻はかなり特定できるのですが、絞殺の場合…何と申しますか、ゆっくりと亡くなるケースがありまして、特定が困難な場合がございます」

横川「あら？ そう？」

真壁「今回の場合は重雄さんのご友人が自宅に訪ねられ、死体発見に至っています。…その時間が午後10時。最後の目撃証言が午後6時…よって、死亡推定時刻は、昨夜午後6時から10時ごろと推定される訳です」

横川「結構いい加減なのね、警察の捜査って。ドラマで見る程じゃないわね…実際」

真壁「とても耳の痛い話ですね。…さて、横川貴子さん。48歳。被害者の横川重雄さんの妻で現在は別居中。ブティック店経営。…間違いはございませんか？」

横川「ええ、間違いないわ」

真壁「ちなみに昨日の午後6時から10時、どちらにいらっしやいましたか？」

横川「まさか、私を疑っているつもり？ …でも、仕方ないわね。別居中の夫婦ですものね。…動機ならいくらでもある。…そう、おっしゃりたいのね。…刑事さん」

真壁「いや、一応…関係者に一通りの聞き込みをしているに過ぎません。…あくまで任意同行ですから、…貴子さんに必ずしも同行して頂く義務はないんです。寧ろ、ご協力くださり感謝しております。…で、その時間…どちらにいらっしやいましたか？」

横川「…自宅よ。だって、マロンちゃんがお腹を空かせているんだもの」

真壁「ま、マロンちゃんと申しますと？」

横川「シャルトリユール。猫よ。フランス原産のね。『生きたフランスの記念碑』とか『フランスの宝』と呼ばれている由緒ある最高級の猫。…刑事さんみたいな人には、一生手に入れられない『微笑みよ』」

真壁「…つまり、アリバイは存在しないということですね？」

横川「な、何？ 私を犯人扱いするの？」

真壁「いえいえ、そういう訳ではありません。所謂、事務的手続きです」

横川「そう？ そうやって、ひとりひとり…話を聞いて周るのね、刑事さんて？」

真壁「そ、そうですね。それが仕事ですから…」

横川「案外地味な仕事ですことね。ドラマでは随分派手な雰囲気なの…」

真壁「実際、そんなところです。ところで、貴子さん！…重雄さんのご自宅にいらっしゃった事はごさいますか？」

横川「いえ、一度も…」

真壁「一度も…ですか？」

横川「ええ、一度たりとも行っておりませんわ。だって、離婚調停中の夫婦なのよ。裁判所以外で会う理由がありませんして？」

真壁「…それも、そうですね。でも、離婚申請の理由が、貴子さん…あなたの経営されるブティックの経営状態にあると、家庭裁判所の書面には記載されています。度々、不渡りを出しており、都度それを救済したのが、資産家である重雄さんであったと…」

横川「ファッション業界はね。常に流れの先端に乗らないと駄目なの。時には、失敗することだってあるわ。でも今では、ファッション誌にも取り上げられるお店のひとつ。ご安心くださいませ」

真壁「…ところが、ここ数年。海外資本のファッション・ブランドが相次ぎ出店し、経営状態は厳しいと伺っております」

横川「…まあ、正直…経営状態は以前よりは厳しくなったわ。…でもね、重雄…横川には会っていませんし、資金提供も申し入れていません」

真壁「その通りのようです。重雄さんの部屋から、貴子さん…あなたの指紋はひとつも発見されておりません」

横川「ほらね？ 私は重雄の部屋には行っていません。これで間違いないわよね、刑事さん」

真壁「確かに指紋は発見されませんでした。しかし、ファッションに人一倍気を使う貴子さん、あなたはシルクのロンググローブを常にしているっしやる。…そして今も。…指紋が発見される筈はありませんよね」

横川「だからと言って、私が重雄の部屋に行ったという理由にもならないわ!」

真壁「おっしゃる通りです。何の証明にもなっていません」

横川「私も忙しいの! いい加減にして下さる?」

真壁「ところで、貴子さん。何でも足首を捻挫されたとか?」

横川「ええ先日、近所の緑公園で子供の遊ぶボールに乗り上げてしまって、見事に捻挫してしまっただわ。…情けない話よね」

真壁「いえいえ、誰にでもあることです。寧ろ、捻挫で済んで良かったです。下手すれば、骨折もしかねませんからね」

横川「ま、不幸中の幸いというところね」

真壁「そこで、貴子さん!…これをご覧頂きたいのですが…」

横川「そ、それは…何…かしら?」

真壁「…ボールです。各種色々取り揃えてみました。…よろしければ、貴子さんが乗り上げたというボールを指で指し示して頂きたいのですが…よろしいでしょうか?」

横川「え、ええ。構わなくてよ…」

真壁「では、お願いします。いったい、どのボールを踏んでしまったのでしょうか?」

横川「……………!!」

真壁「…このボールで、間違いありませんか？ ……貴子さん」

横川「え、ええ。間違いなくてよ。この形、はっきりと憶えているわ」

真壁「そうですか、貴子さん。…貴さんは、このラグビーボールに乗り上げて捻挫されたのですね」

横川「そういうことです」

真壁「しかし、小さな子供がラグビーボールで遊ぶだなんて、そういうあることじゃありません。大抵の場合、野球かサッカーのボールだと思われるのですが…」

横川「な、何が言いたいの？」

真壁「貴子さん、調べさせて頂きました。ご近所の緑公園はボール遊び禁止の公園なんです。…つまり、緑公園で捻挫したというのは嘘ということになります」

横川「う、嘘ですって!？」

真壁「因みに貴さんが指し示されたラグビーボール、…重雄さんの部屋にあったボールなんです。貴さんと別居後、友人の影響でラグビーに熱中されるようになったそうです」

横川「…そうだったの。法律上まだ妻だというのに何も知らなかった訳ですね、夫のことを…」

真壁「貴子さん。あなたは重雄さんの部屋にいらっしやっただ。…それは間違いなく事実です。重雄さん殺害時、もしくは殺害後、ラグビーボールに乗り上げ捻挫されたと推測されます。…何でしたらラグビーボールに付着したDNAを採取し科捜研に回しますが、如何致しましょう?」

横川「もういいわ…刑事さん。お若いのに随分と優秀なんですね。…確かに…昨日、私は重雄の部屋を訪れました。勿論、ブティックの経営資金についてです。…あっさりと、断られました。女は恐ろしい生き物なんですよ。喧嘩している夫にも頼み事が出来る。そして、たった一瞬で獣に変わるのですから…」

真壁「そうですね、とても残念です。…今から通常の逮捕状請求の要請をします。もう暫らくお待ちになって下さい」

横川「ええ、お待ち致しますわ」

真壁「それと…自分にとって、もうひとつ…とても残念なことがあります」

横川「あら?それは何かしら?」

真壁「先程、お見せした大量のボールに仕込んでおいたのです。形式番号RB-79。天頂部の180mm低反発砲が唯一の武装であることから『丸い棺桶』、『動く棺桶』とまで言われた連邦軍のモビルアーマー『ボール』のプラモデルを…」

横川「まあ?そんな手の込んだことを?」

真壁「：残念ながら、目にもして頂けませんでした。：それが、：
残念で仕方ありません」

鑑識2（前書き）

「タイトル」

鑑識2

「ジャンル」

刑事物

「登場人物 三人（男）＋一匹」

真壁伸一

警視庁捜査一課刑事・巡査部長

妙典の部下・後輩

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

倉田勝則

警視庁刑事部鑑識課・巡査長

オタク想像図と一筆たりとも違わぬ見事なまでのオタクで且つオ
カマというツワモノ

鑑識官としては、かなりの凄腕

素っ気無い妙典に恋焦がれている

吉村隆俊

刺殺事件の第一発見者

不動産資産家

殺人被害者の片山とは旧知の仲

シロ

吉村の飼っている柴犬

「題材」

今度こそ仕事しまっせ！

鑑識2

吉村「お前ら、いつまで掘り返す気じゃー!」

真壁「す、すいません!吉村さん。…何せ、殺人事件でありまして、鑑識捜査も慎重に成らざるを得ないんです」

吉村「言っておくが、ここの山は先祖から伝わるウチの山じゃ!勝手に荒らされちゃかなわん!」

真壁「吉村さん。申し訳ありませんが、捜査令状は取っております。日本国憲法35条1項には住居及び書類、所持品について、侵入、搜索及び押収を受けることのない権利が記されています。しかし、令状がある場合はその範疇にはありません」

吉村「刑事さん、…素人に随分と難しいことを言いなされるなあ」

真壁「いえ、それらも正しくお伝えし、正当な捜査を行うのが我々警官の仕事です。…それと、この令状は現場検証に限ったもので、逮捕などの人身の自由の制約は含まれておりません」

吉村「いろいろ、難しいものじゃな。…法律って」

真壁「ええ、そうなんです。…何か、ひとつ作業を行うだけでも必要とする書類が山の様に発生するんです」

吉村「そりゃ、大変な仕事じゃのお」

真壁「ご理解頂けて幸いです。…ところで、被害者の片山さんとは

旧知の仲だったとお聞きしましたが？」

吉村「…ああ、片山とはもう何十年も腐れ縁じゃ」

真壁「それが、こんなことになってしまつて…お気の毒です」

吉村「あいつとは、指し仲間じゃ…」

真壁「指し仲間？ …将棋指していらつしやるのですか？」

吉村「ああ、…もうガキの時分からじゃ。…それが、刃物に刺されるとは…洒落にもならんわい」

真壁「心中お察し申し上げます」

吉村「……………」

真壁「…ところで、吉村さん。何でも当事件の第一発見者だとか…。詳しいことをお聞かせ願えないでしょうか？」

吉村「刑事さん。わしを疑つておるのかね？」

真壁「いえ、そういう訳ではありません。あくまで一連の事務手続きとご理解頂きたいです」

吉村「…第一発見者を疑え！…刑事ドラマでは、よく耳にする台詞じゃが？」

真壁「はは！…全くの嘘だとは申しませんが、テレビドラマでは少々誇張された演出が目立ちます。…そんなに緊張されなくても大丈夫

夫ですよ。重要な情報提供者でいらっしやるのですから、警察としては寧ろ感謝する立場にあります」

吉村「…わしが、シロ…この柴犬じゃが…を連れて、いつも通り散歩をしておった。そしたら、突然シロがわしの下から離れ、草むらへ駆け込みよった。…追いかけて、草むらを掻き分けたら…片山じやった」

真壁「それは、さぞショックだったでしょう。…その時、片山さんは…まだご健在でしたか？」

吉村「いや、もうとっくに…死んでおった」

真壁「それは、どのようにして確認されたのでしょうか？」

吉村「…手首を掴み、脈をとり、鼻先に耳を近づけて息をしとるか確かめた。…それ以前に、…顔面は蒼白じゃったよ。肌や関節も心なしか、硬かった」

真壁「…それは、既に死後硬直が始まっていたということですね。冷静で的確な対応に感謝いたします。…暫らく、お待ち頂けますでしょうか」

真壁は吉村にペコリと一礼し、鑑識の下に向かった。

真壁「…倉田さん！何か、分かりましたか？」

倉田「あら？ 妙典さんじゃなくて、真壁くんが担当なの？…この

事件」

真壁「…いや、本当は妙典さんなのですが、…突然腹痛を訴えまして…代わりに自分が…」

倉田「せっかく妙典さん に出会えると思って来たのに…。残念ねえ」

真壁「自分からも、よく言っておきます」

倉田「是非 お願いするわ」

真壁「…で、何か特徴的な事はありませんでしたか？」

倉田「そうねえ。…これといって争った形跡はなし。顔見知りの犯行ってトコかしら」

真壁「そうですか。…顔見知りですか」

倉田「真壁くん！…凶器のナイフの指紋は拭き取られていることしか私は知らん。心当たりはあるのかね？」

真壁「…殺人犯はそんな簡単な相手じゃありません」

倉田「ふふ、そうねえ ……真壁くん。これといって特徴がないのが特徴かもね」

真壁「…！？」

倉田「どうしたの？ 真壁くん！」

真壁「倉田さん！…片山さんの足首に噛み傷があるのですが…」

倉田「ええ、そうですね。…歯形からいって、柴犬のようね。…ほら、あそこにいるような」

真壁「倉田さん、ひとつお尋ねします。この血の滲み具合からいって、生前のものか？ 死後のものか？ 判別はつきませんか？」

倉田「うーん 本当はちゃんと調べなきゃいけないんだけど、死体の硬直具合からいって…生前のものね？」

真壁「…そうですね。…ありがとうございます。倉田さん」

吉村の下へ戻る真壁

真壁「…ああ、やれやれです」

吉村「何か分かったのかね？…刑事さん」

真壁「いえ、分からないんです」

吉村「そりゃ、大変じゃのう」

真壁「吉村さん。…自分が言ったのは『分からない事』が分かったという事です」

吉村「また難しいことを言いよるのぉ…」

真壁「吉村さん。あなたは先程こつおつしゃいました。…『シロが草むらへ駆け込んだ』、顔面は蒼白だった。肌も関節も心なしか、硬かった』」

吉村「それがどうしたのじゃ？」

真壁「もうひとつお伺いします、吉村さん。…この辺りで柴犬を飼っていらっしやる方を、他にご存知ありませんでしょうか？」

吉村「…ウチのシロだけじゃな」

真壁「…そうですか。残念です、…吉村さん。あなたの証言には矛盾があります」

吉村「やっぱり、わしが犯人と言いたいのかね？」

真壁「…いえ。まだ、犯人かどうかまでは、現段階では断定できません。…ですが、明らかにおかしいのです。吉村さん、あなたの証言が！」

吉村「……………」

真壁「吉村さんの証言によると片山さんの死後硬直は、もう既に始まっています。シロが片山さんの足首にじゃれついたとすれば、その時です」

吉村「それで、何を言いたいのじゃね？」

真壁「ところが、片山さんの足首には生前についたと思われるシロの噛み傷が残っていました。…ということは、吉村さん、あなた

は被害に会われる直前の片山さんと会っていたことになります。…
とても、大きく興味深い矛盾です」

吉村「しかし、刑事さん！ あんたはさっきわしにこう言った。『
現場検証だけで、逮捕などの人身の自由の制約は含まれていない』
とな！」

真壁「…確かに。しかし、警察官職務執行法第2条第1項、第2項
では『警察官は、異常な挙動その他周囲の事情から合理的に判断し
て何らかの犯罪を犯し、若しくは犯そうとしていると疑うに足りる
相当な理由のある者又は既に行われた犯罪について、若しくは犯罪
が行われようとしていることについて知っていると認められる者を
停止させて質問することができる。その場で前項の質問をすること
が本人に対して不利であり、又は交通の妨害になると認められる場
合においては、質問するため、その者に附近の警察署、交番又は駐
在所に同行することを求めることができる』と規定されております」

吉村「法律の話は本当に難しいのう」

真壁「…ご同行頂けませんか？…吉村さん」

吉村「…しょうがないのう。…わしは奴に借りがあつた。それもた
つた数万の賭け将棋の負け金じゃ。負けを認めたくなかつただけな
んじやるうなあ。つまらぬ老人の意地じゃ…。老棋士が見事に囲わ
れてしもうたわい」

真壁「そうでしたか。では、すみません。直ちにご足労願います」

倉田「どう？ 何か進展はあつたの？」

真壁「ええ…ご足労いただいて、感謝しております」

倉田「それ？ グエンでしょ？…ヒゲGの」

真壁「流石は倉田さんです」

倉田「…ということは、『今日は顔合わせです。こちらが高いところにいると脅かすだけでよろしいでしょう』…ね？」

真壁「…それは、長老の台詞ですね」

吉村「しかし、刑事さん達の話は難しいことだらけじゃ。…さっぱり意味が分からんわい」

真壁「吉村さん。ご安心下さい。おそらく自分とここにいる監察官だけが、特殊なんです」

倉田「まあ、ある意味ニュータイプね。それとも強化人間かしら…」

対決（前書き）

「タイトル」

対決

「ジャンル」

刑事物

「登場人物 四人（男）」

妙典博道

警視庁捜査一課刑事

自身を不死身と信じて疑わぬ男

頭は頭突きのために存在すると思っっている肉体派

「ヘビーマタルに生き、ヘビーマタルに死ぬ…けど、俺様不死身だから死なねえ」がモットー

真壁伸一

警視庁捜査一課刑事・巡査部長

妙典の部下・後輩

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

大場

警視庁捜査一課9係係長

プログレッシブ・ロックを愛する

沈着冷静ではあるが、割とお茶目

馬場正

警視庁捜査一課13係係長

妙典と真壁の直属の上司
刑事らしからぬ温厚な性格
得意技はオヤジ・ギャグ

「題材」

禁煙

対決

妙典「…大場さん、…あんたには、ぜってえー負けねえ!」

大場「そう言う妙典。…随分と苦しそうだな?」

妙典「何、言ってるんすか? 全然、平気っすよ、俺様」

大場「やせ我慢と減らず口だけは、一人前だなあ」

妙典と大場を見つめる真壁

真壁「係長、…先程から何をなさっているのでしょうか? おふたり」

馬場「…ああ、あれか? 煙草、値上がりしたでしょ。…それで禁煙対決してるんですよ」

真壁「はあ、何とまあ緊張感のない対決ですね」

馬場「うん。僕も煙草止めて長いけど、…結構大変なんですよ」

真壁「自分は吸わないので、その苦しみ…何とも理解できないのですが…」

馬場「…ところで、真壁くん。あのふたり、どちらが勝つと思えますか?」

真壁「…係長、残念ながら、勝敗はつきません。おふたりとも、最早限界です」

馬場「やっぱりそう思いますか？ 真壁くんも」

妙典と大場を見つめる真壁と馬場

妙典「へっへっへっへっへ…大場さん、何か嫌な汗が吹き出ていますぜ」

大場「妙典、お前も他人のこと言えん顔しとるぞ」

妙典「それは、大場さんの目が霞んでいる証拠。もういいんですぜ。…楽になりましょうや」

大場「何を言つとる！ 妙典。お前の方こそ、楽になりたいのでは？」

妙典「う…うおおおおおおおおおおおおおー！ げ…限界が来たああああー！」

大場「そ…それみる、妙典。お前こそ、忍耐が足らんのだ」

大部屋を駆け、喫煙ルームへ向う妙典
それを追いかける大場

馬場「真壁くんの言った通りでしたね。…勝負はつきませんでした」

真壁「…見ておくが いい！ 戦いに敗れるとは、じつじつじつだ」

オリジン（前書き）

「タイトル」

オリジン

「ジャンル」

刑事物

「登場人物 三人（男）」

妙典博道

警視庁捜査一課刑事・巡査部長

自身を不死身と信じて疑わぬ男

頭は頭突きの為に存在すると思っっている肉体派

「ヘビーマタルに生き、ヘビーマタルに死ぬ…けど、俺様不死身だから死なねえ」がモットー

真壁伸一

警視庁捜査一課刑事・巡査部長

妙典の部下・後輩

頭脳明晰

三度の飯よりガンダムが好き

倉田勝則

警視庁刑事部鑑識課・巡査長

オタク想像図と一筆たりとも違わぬ見事なまでのオタクで且つオ
カマというツワモノ

鑑識官としては、かなりの凄腕

素っ気無い妙典に恋焦がれている

「題材」

祝！機動戦士ガンダム THE ORIGIN アニメ化決定！

オリジン

真壁「お疲れ様です！ 真壁、只今現着しました！」

倉田「あ…あら？ 真壁くん。早かったじゃない。…妙典さんは？」

真壁「…ちょっと、遅れるそうです」

倉田「あら、そう。相変わらずマイペースよねえ。…ちょっと、ブローケン・ハート！」

真壁「ええ、困ったものです。…ところで、どうでしょうか？ 現認のほどは？」

倉田「そ、そうね、ええ、現認報告の発信準備をさせるわ」

真壁「…それ、ミライさん…ですよね？」

倉田「流石ね、真壁くん。…いいわ、報告してあげる」

ブウウウウウ…（携帯のバイブ音）

真壁「…あ！？ ちょっと、失礼します」

倉田「ええ、どうぞ。そのシャア専用携帯もすっかり見慣れたわ」

真壁「……………！！！」

倉田「ど、どうかしたの？ 真壁くん」

真壁「今、同人仲間から、メールがあったのですが…」

倉田「何かしら？」

真壁「オリジン。…ガンダム THE ORIGINのアニメ化が
決定したそうです」

倉田「ええええええええ！？ そ…それって凄い話じゃない？」

真壁「ええ、凄いです。…凄すぎます。まさに『誰もが待っていた。
これが本当のガンダムだ』です」

倉田「それはそうと、テレビ放映はいつからかしら？」

真壁「い…いえ、今のところテレビアニメとの記述はいつさいあり
ません。…OVAの可能性も否定できない状況です！」

倉田「…すると、ユニコーンみたいなの？」

真壁「倉田さん。もし、UCのクオリティーでオリジンが制作され
るとなると…」

倉田「ええい！ 連邦軍のモビルスーツは化け物か！？ …という
ことになるわよね？」

真壁「そ、そうだよ。倉田さんの言う通りだ」

倉田「でも、ちょっと待ってちょうだい！ 矛盾点は？ オリジンの矛盾点はどうなるのかしら？」

真壁「…ジヨブ・ジヨンの回想するルウム戦役での黒い三連星の機体がMS-05だったり、『シヤアの活躍を知らない』というコズンの台詞とか…ですか？ …もちろん修正されるとは思っていますが」

倉田「そうよね。…それくらいじゃないと、『納得できるような、納得できないような説明』とアレルヤに言われても仕方ないわよね…」

真壁「…それもですが、いったい第1話はどこから始まるのでしょうか？ シヤアとセイラさん…いや、キャスバルとアルテイシアの幼少期から始まるのでしょうか？ ザビ家がダイクン家にとって代わってサイド3を掌握するところから始まるのでしょうか？ …そして公国制を發布し、連邦との確執が生まれ、キャスバルが公国軍のエース『シヤア・アズナブル』となり、開戦をむかえルウム戦役に至る。…こ…これですよ、倉田さん、自分が見たかったガンダムはっ…！」

倉田「でも…それじゃあ、ガンダムが登場するまでに随分と時間がかかるわよね」

真壁「…は、確かに…そうです。始動編、激闘編…と区切っていく方が自然ですね。…で、でも！ ジャブローはギアナ高地の地下という設定になり、ジャブローから北米、アジア、ヨーロッパを指し、オデッサに突入するんですよ！」

倉田「オデッサで、連邦はジムを大量投入するわけね」

真壁「そして、マ・クベは宇宙^{そら}へ上がらず、黒海で自爆する」

倉田「中将なのよね？ オリジンでのマ・クベの階級って？」

真壁「そうです。…ブライトさんも中尉に、ワッケインも少将になっ
ています！」

倉田「シャリア・ブルの風体もテレビ版とは随分違うんだけど…」

真壁「モスク・ハン博士もそうです。そして、シャアも23歳とい
う設定になっていますし…」

倉田「また、0080でも見てみようかしら…」

真壁「第08MS小隊も、ですね！」

ダッ！ダッ！（大げさな嫌味のように偉そうな足音）

妙典「ああーっ！ 随分と楽しそうだなあ。…何か、あったか？
変態オタク眼鏡小僧とアキバ二丁目えっ！」

倉田「まあ！？ 妙典さん」

真壁「あ、いや…ちょっと…」

妙典「何、ニヤついてんだ？ このオタクどもおー！」

真壁「…妙典さん。オタクは否定しませんが、大事件なんです」

妙典「大事件？ ……現認結果か？」

真壁「そうじゃないんです、妙典さん。まさに…見せてもらおうか、安彦良和のガンダムとやらを！ ……という状況なんです」

妙典「はあ？ 何、言ってるんだ？ てめえ！ ……で、サボってたわけですかい？ 真壁巡査部長殿」

真壁「だ…黙れ！ 俗物！」

妙典「はあ…、面倒くせえ。ま、これでも食って落ち着けや。この変態オタク眼鏡小僧があ！」

真壁「妙典さん、こ…この弁当は？」

妙典「給料前の金が一番ねえ時に奢ってやる！ ……と俺様が言っている！」

真壁「は、はい。た…大変取り乱しまして、すいませんでした。ご馳走になります！ まさか差し入れとは…」

妙典「ああ、食べ！ 食べ！ ……オリジン弁当のかつカレーだがな！」

倉田「あら！ 羨ましいわ 真壁くん。それ、クミンシードとカ
ルダモンの香りたつ後味爽やかなスパイシーカレーって評判よ！」

真壁「…諸君らの働きには感謝の言葉もない、ん？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7335n/>

不死身刑事 -Voice From The Vault-

2011年10月7日23時41分発行